

## 社会的養護における措置変更の実態調査

### —自由記述からの分析—

○ 立命館大学 石田 賀奈子 (06061)

野口啓示 (福山市立大学・02736), 伊藤嘉余子 (大阪府立大学・03930)

〔キーワード〕 社会的養護, 措置変更, テキストマイニング

#### 1. 研究目的

本研究の目的は, 社会的養護を担う児童福祉施設における措置変更として他施設等へと退所したケースについて, 措置変更の際に配慮された事項を明らかにすることから, 措置変更における円滑な支援プロセスを確保するために必要な事項について提言することである。

社会的養護において, 措置変更が発生することは珍しいことではない。厚生労働省による「児童養護施設入所児童等調査結果」(2013年2月現在)によると, いずれの施設においても児童の委託経路および入所経路は, 家庭からという児童が多くを占めるが, 情緒障害児短期治療施設(以下情短)入所児童の15.8%, 児童自立支援施設(以下自立)の13.8%は児童養護施設(以下養護)からの入所となっている。措置変更は子どもの生活を変えることを意味し, 子どもの人生に大きな影響を与える。子どもにとって, 措置変更は重大な出来事であり, 大きな不安や葛藤を伴う事態であることが推察される。しかし, これまで, 措置変更に焦点をあてて行われた調査は多くない。そこで, 報告者らは, その実態を明らかにすべく全国の社会的養護を担う施設に対し郵送法によるアンケート調査を実施した。この調査の結果については, 昨年度の本大会において, 野口ら(2016)が措置変更された子どもの特徴や, 措置先との関係性を報告した。筆者は, 措置変更の際に配慮された事柄への「考え方」を尋ねた25項目を探索的に因子分析した研究発表を行った(石田ら, 2016)。今回の報告は, 退所児童用の調査票における自由記述の分析から, 措置変更を行う際必要な準備を構成する要素とはどのようなものかを検討したものである。

#### 2. 方法

##### 1) 調査対象

全国の乳児院133か所, 児童養護施設(以下養護)600か所, 児童自立支援施設(以下自立)58か所, 児童心理治療施設(以下心理)43か所, 母子生活支援施設(以下母子)198か所の合計1,032施設に, 措置変更の実態を尋ねるアンケート用紙を配布した。アンケート用紙は2015年12月24日に郵送した。なお, 調査対象は2014年度に措置変更となった全ケースとした。2015年12月24日から2016年2月10日までに返送いただいた分を分析対象とした。

##### 2) 調査票の概要

各施設種別間の措置変更の実態が明らかになるよう「措置変更ケースにおける支援内容や配慮事項に関するアンケート調査」施設全体用, 退所児童用, 入所児童用の3種類を作成し, 配布した。退所児童用と入所児童用は個別ケースについて1ケースごとにその特徴を尋ねるものである。今回の発表では, 退所児童用に回答されたアンケート用紙を分析対象とした。

#### 3. 倫理的配慮

収集したデータについては統計的に処理を行い, 結果の公表に際して施設や個人が特定されることのないように十分配慮した。なお, 本調査については, 大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科設置の倫理審査委員会の承認を得ている。

#### 4. 研究結果

##### 1) 回収率

568施設から回答を得た。回収率は55.1%であった。また, 「措置変更ケースにおける支援内容や配

慮事項に関するアンケート調査」退所児童用のアンケート用紙は、乳児院 606, 養護 300, 自立 114, 心理 79, 母子 68, 無回答 14 から合計 1,181 件回収した。

## 2) 自由記述からの分析

質問紙において「児童の措置変更の前に十分な準備ができたかどうか」を「1. まったくできなかった」から「6. とてもできた」の6件法で回答を得たものを、「必要な準備ができなかった」群（1, 2を選択した群）, 「どちらともいえない」群（3, 4を選択した群）, 「必要な準備ができた」群（5, 6を選択した群）に分類した。「必要な準備ができなかった」271事例, 「どちらともいえない」93事例, 「必要な準備ができた」453事例の自由記述を分析対象とした。分析には伝統的な内容分析（content analysis）の考え方とテキストマイニング技術を活かした分析（樋口, 2014）を得意とするテキストマイニングソフト kh coder を用いた。

## 3) 結果

### ①各群の頻出語の比較

まず, 探索的な分析として3つの群の自由記述における頻出語の検出を行い, 比較した。詳細は当日資料で示すが, 「必要な準備ができた」群では, 「情報」, 「交流」といった単語が上位に挙がっていた。措置変更先の施設への「情報提供がしっかり行えた」関係機関との「情報共有が行えた」といったことが示された。また, 交流については, 「委託前の交流」, 「措置変更先の入所児童との交流」といったことが行われていることが示された。いずれの群においても「準備」は頻出語として上位になったが, 「必要な準備ができなかった」群および「どちらともいえない」群では「施設内での準備にとどまってしまった」「十分な準備ができなかった」といった記述となった。

### ②抽出後の対応分析

次に, 対応分析を行い, 頻出上位 60 語を用いて, 各群の特徴的な語をプロットした。詳細は当日配布資料で示すが, 「必要な準備ができた」群では, マッチングを丁寧に行い, 事前に機関や里親との間で連携し, 情報交換や交流が行われていることがうかがえた。「必要な準備ができなかった」群では, 「急」, 「短い」, といった言葉がプロットされ, 措置変更の決定が急に行われ, 短期間での準備となったため, 十分な対応ができなかったことが示された。次に, 措置変更の種類を「発達に伴う措置変更」と「発達課題に対応する措置変更」に二分し, 対応分析を行った。「必要な準備ができなかった」群と「発達課題に対応する措置変更」群が似た位置にプロットされ, 発達課題に対応する措置変更群は急な対応に迫られ, 十分な準備ができないままの措置変更となっていることが示された。

## 5. 考察

本研究結果から, 以下の点が示された。

- ①自由記述の分析から, 発達に伴う措置変更は機関間, 施設・里親間連携が十分にとられ, 時間をかけて情報を共有したうえでの措置変更が行われ, 「必要な準備ができた」とされるケースが多い。
- ②一方, 必要な準備ができなかった措置変更は, 発達課題に対応する措置変更のケースの特徴として示され, 養育の連続性が損なわれないよう配慮したソーシャルワークを展開する上での課題があると推察された。

## 謝辞

本調査研究は, 平成 27 年度厚生労働省: 子ども・子育て支援推進調査研究事業「措置変更ケースにおける支援内容や配慮事項に関する調査研究事業」(主任研究者: 伊藤嘉余子) の一部として実施したものである。本調査研究にご協力頂いた関係諸氏に深謝いたします。